



北大雨竜研究林でシラカバの育成について語る吉田俊也教授＝幌加内町（宮永春希撮影）

シラカバ 伸びる可能性

北海道を象徴する樹木シラカバ。道内各地に自生し、防風林としてもなじみ深い。その木肌の白さを生かした家具・内装を備えたゲストハウスが、今月下旬に上川管内東川町中心部にオープンする。3棟のうち1棟はテーブルや椅子、台所の棚などがシラカバでできている。部屋には明るく開放的な雰囲気、施工した町内の家具メーカー「木と暮らしの工房」代表の鳥羽山聡さん(54)は「地元の木を使った部屋で北海道の雰囲気を味わってもらえれば」と期待を込める。

鳥羽山さんは、旭川近郊の家具会社や研究者などでつくる一般社団法人「白樺プロジェクト」（事務局・旭川）の代表。同プロジェクトでは、大半がパルプ用チップに加工されていたシラカバを、さまざまな商品に生まれ変わらせている。

シラカバは同じ広葉樹のミズナラやアオダモと異なり、不遇な扱いを受けてきた。ミズナラやアオダモは高度成長期に家具材などとして価値が高まり、道内でも大量に伐採された。対してシラカバは、60年程度の樹齢を超えると病原菌で幹まで腐るリスクが高まったり、家具材にするには太さが足りなかったりと、マイナス面ばかりに目が行きがちだった。

だが、道立総合研究機構林産試験場（旭川）の専門研究員秋津裕志さん(62)は8年ほど前、荒地でも日が当たれば育ち、他の広葉樹に比べて成長が早いといったプラス面に着目。「うまく加工すれば、価値が生まれるのでは」と研究を始めた。すると幹などはクルミやサクラと同程度の強度と分かり、丸太を家具の材料にする道を探った。その過程で鳥羽山さんと知り合い、2018年に白樺プロジェクトを立ち上げた。

プロジェクトに賛同した会社や工房が、家具をはじめ部屋のフローリング材や内装材などに加工し、ギターやハープといった楽器にも使用するようになった。樹液成分を含む化粧水や樹皮のかご、木の器なども少しずつ人々に浸透してきた。

プロジェクトの新たな目標は「持続的に使えるように、植えて育てること」。担当する研究者は、造林学が専門で北大北方生物圏フィールド科学センターの吉田俊也教授(55)だ。

普段は北大雨竜研究林（上川管内幌加内町）などで持続可能な森づくりを研究する吉田教授は、シラカバの「育てやすさ」を指摘する。例えば植林する際に、かき起こし（地表をはいでササ類の根や病原菌を取り除くこと）が針葉樹より浅くて済み、苗を定植しなくても種子が定着すれば育つ。「スギなどの針葉樹のように、育成から伐採までを計画的に育てることができれば、林業として扱うことが現実になる」。シラカバが秘める可能性を信じている。

（和泉優大）＝18面に続く



家具や内装にシラカバを活用したゲストハウスを施工した「木と暮らしの工房」代表の鳥羽山聡さん＝東川町

